るとても、ぞんじませぬといふ、さい介きいて、おのれらがあたしはさい〳〵の事ぞや、一をうつてばんを出るおのれが、おふめにみていれば、目のないもの出やとおもふが、たま〳〵ものをいひつけても、ぐし〳〵ばかりぬかして、出ろきをくろとあらそひても、あらそわせぬぞ、くつともぬかすときるぞ、手はみせぬといふ、その時三四郎、いかにでく介、もはやばんじきわまつた、此うへ、はどうもならぬ、だんなむし〳〵いわ出やればせひなし、おみとをれとさしちがひ四の二さと、いろをちがへていへば、四の二といわれて、さい介ものぼりつめてをりばがなかつた、

〔枕草子七〕きよげなるおのこの、すぐろくを日ひとひうちて、猶あかぬにや、みじかきとうだいに火をあかくかゝげて、かたきのさいをこひせめて、とみにもいれねば、どうをばんのうへにたてまつ、かりぎぬのくびのかほにかゝれば、かた手出てをしいれて、いとこはからぬ出ぼうしをふりやりて、さはいみじうのろふとも、うちはづしてんやと、心もとなげにうちまもりたるこそほこりかに見ゆれ、

〔嬉遊笑覽雜四伎〕采を筒に入るゝとは、敵のふりたる采なれば、筒は我もつて、采は敵に入さする、其時敵さいをとりてこひのろふなるべし、

〔徒然草上〕雙六の上手といひし人に、其てだてを問侍りしかば、かたんとうつべからず、負じとうつべきなり、いづれの手かとくまけぬべきと案じて、其手をつかはずして、一めなりとも遲くまくべき手につくべしといふ、

作法

〔めのとのさうし〕御すぐろくなどあそばし候とて、ばんをめしいだす事あれば、まづ石の袋をもちてまいり、そののちばんをまいらせ、さてちと御けしきをうかゞひて、うつしてむかひのいしをたてゝ、御二人のなかへまいらせらるゝことなり、めしつかはるゝ人にも御をしへ有べし、

〔宗五大草紙上〕色々の事